堀内さんと愉しむ四字熟語　第11回

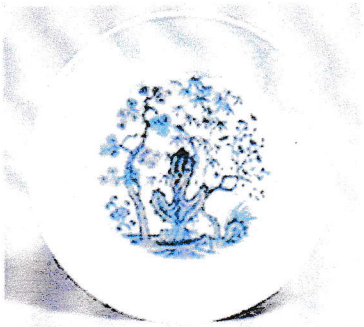
「歳寒三友」

文・写真：堀内　正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

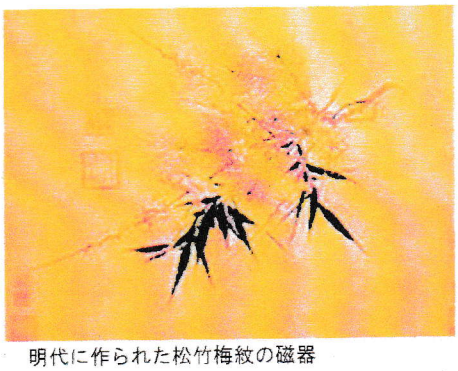
春節（ことしは 1 月28日）が過ぎても二月の朝晩の寒さはまだ骨身にこたえます。そんな寒中にいるような厳しい人生の時期に、頼りになる三人の友がいたら心強いですね。唐の詩人白楽天は琴・詩・酒を「三友」としました。若い諸君ならワイングラスを傍らに、ギターを爪弾きながら、自作の詞で歌うといったところ。深い憂いも三友によって融かすことができるでしょう。

松と竹とは冬季にも枯れることなく、梅は寒さに耐えて花を咲かせます。それぞれに旺盛な生命力で生き抜く姿を愛でて、松・竹・梅を「歳寒三友」（王質『雪山集「送鄭徳帰初呉中」』など）と呼んでいます。

NHKの連続ドラマ「梅ちゃん先生」で、末っ子の梅子が父から三人の子どもに松子、竹夫、梅子と名づけたいわれを聞かされて納得するシーンがありました。とくに雪中に花をつける梅には気品が漂います。そこで高潔の士に見立てて「雪中高士」と称えられています。



松竹梅は高尚な人格の象徴に



明代に作られた松竹梅紋の磁器

道真を追って京から太宰府に飛んだ「飛梅」

白楽天の「北窓三友」詩を読んだ菅原道真は、琴と酒は「交情浅し好去（さよなら）だ」と拝辞して、詩だけは「独り留まる真の死友」と認めて生涯の友としています。

太宰府へ左遷された道真を慕って京から飛んだという「飛梅」が天満宮に残されていて、春先に「東風（こち）」が吹くと、白い花を咲かせます。流離の地で怨念を残して亡くなった主人を思い起こして咲くというのは、梅ならではの物語でしょう。

道真は学業の神さまとして合格祈願の受験生の頼りにされ、東京の湯島天満宮では「学業守札」や「学業成就鉛筆」などがよく売れているようです。

松・竹・梅は日本では長寿の意味を添えて縁起がよく、ご存じのお酒の名前や、器物や衣装や建築の図案にもよく見かけます。松・竹・梅は「歳寒三友」ですが、大地が温もってから咲く桃・李・杏は「春風一家」といわれています。

堀内さんと愉しむ四字熟語　第12回

「春山如笑」（しゅんざんじょしょう）

文・写真：堀内　正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

村里の遅咲きの花々も咲きそろうころに、冬のあいだ睡っていた山が本格的な春の訪れを察知して動き出します。木々の芽がいっせいに際立ってくると、山全体が日また一日と華やいでひとまわり大きく見えてきます。次第に「春山如笑」といった姿態になって、それにつれて人びとの心もおおらかになります。

春の季語に「山笑う」があって、子規にも「故郷やどちらを見ても山笑ふ」の句が知られます。先人はこの国に特有の季節変化の前触れや特徴を季語として鋭く捉えて、折々に繰り返される生命の息吹きとの出合いを愛しんできました。「山笑う」は実感のこもる春の情景として待たれています。

春の季語「山笑う」は「春山如笑」（山水訓）から得た

北宋の画家郭熙は、山水画の名手でしたが、四時不同の山容の姿を巧みに捉えています（『林泉高致集「山水訓」』）。

「春山如笑」（山笑う）、「夏山如滴」（山滴る）、「秋山如妝」（山妝う）、そして「冬山如睡」（山睡る）まで、山の四季のたたずまいを表現しており、俳句ではこの詩からそれに見合う四つの季語を得ています。それぞれに味わいがありますが、ひとつとなると、やはり「春山澹冶にして笑うが如く」の「山笑う」でしょうか。

←甲府（成都と友好都市）から天下をうかがった武田信玄

わが国の戦国武将のひとり甲斐に拠って天下をうかがった武田信玄に「春山如笑」と題する漢詩があります。越後の上杉謙信とは詩作の上でも負けず劣らず競っています。謙信の詩で有名なのは軍中の自作「九月十三夜」で「霜は軍営に満ちて秋気清し、数行の過雁月三更」‥こちらは秋です。

信玄が軍旗に掲げた「風林火山」の「動かざること山の如し」の甲斐の山々が、睡りから覚めてうごめく気配に新時代への躍動を重ねています。詩の結句は「一笑靄然として美人の如し」と穏やかでやわらいだ美女の容姿に仮託していますが。

命日は4月12日で、甲府から遠望する南アルプスや八ヶ岳の態様は「春山如笑」にはまだ間があるようです。

堀内さんと愉しむ四字熟語 第13回

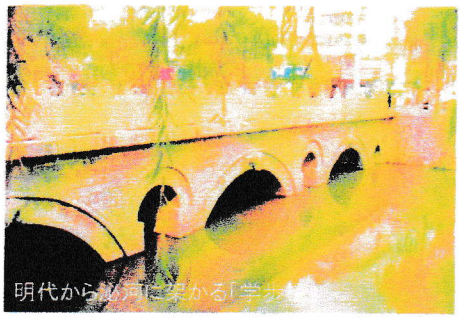
「邯鄲学歩」（かんたんがくほ）

文・写真・堀内　正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

田舎育ちの若者が都ぶりを学ぶとしたら渋谷か原宿か青山あたりでしょうか。

北国の燕の田舎から、ひとりの若者が都ぶりの歩き方を学ぼうと、趙の都だった邯鄲にやってきます。しばらく努めてみたもののサマにならない。簡単にはいかないものだとあきらめて故郷へ帰ろうとしますが、元の歩き方を忘れて歩けない。そこで這うようにして帰るしかなかった。都会にあこがれて出てきて挫折して故郷へもどる。もどった故郷でも受け入れられなくなる、という「邯鄲学歩」（『荘子「秋水篇」』など）のお話です。

「邯鄲学歩」彫像



明代から泌河に架かる「学歩橋」

この「邯鄲学歩」にちなむ「学歩橋」が明の万暦年間（1617年）に石づくりに直されて400年、いまも市内を流れる泌河に架かって用いられています。

中原の古都邯鄲にちなむ成語は1584条とか。それぞれに歴史的故事や伝説があって、独特の文化貢献をしているということで、「成語典故之都」という称号が2005年10月に中国民間文芸家協会から授与されています。市内に「成語典故苑」や「趙苑」を設けて、成語を彫像や碑文にして展覧しています。

邯鄲生まれの成語のうち、みなさんにも親しいいくつかを取り上げますと――

「黄粱一夢」（邯鄲之夢・一枕黄粱とも。廬生が道士呂洞賓から与えられた枕をして一生涯の夢をみて目覚めたが、黄粱はまだ煮えていなかった）、「完璧帰趙」（秦に遣いした藺相如が和氏の璧を無事に持ち帰る。完璧の語源）、「刎頸之交」（藺相如と廉頗によるお互い命をかけた交わり）、「背水一戦」（背水之陣とも。漢の韓信が趙と闘ったとき河を背にして兵の退路を断ち死力を尽くして勝利した）。

雅楽「蘭陵王入陣曲」は北斉時代の蘭陵武王高長恭（573年服毒自死）にちなむ曲目です。市郊外磁県にある蘭陵王墓の前で、1992年9月に奈良大学と南都楽所の雅楽団が「陵王の舞」を演じました。1400年を隔てての「秘曲帰趙」として話題になりました。

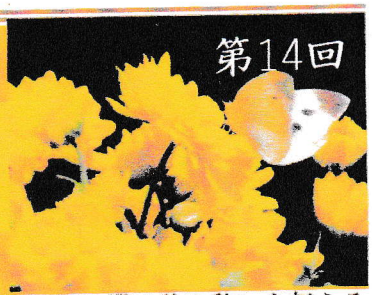
宋代には園芸種も育成され
『菊譜』が出版された

堀内さんと愉しむ四字熟語

第14回

明日黄花

みょうにちこうか

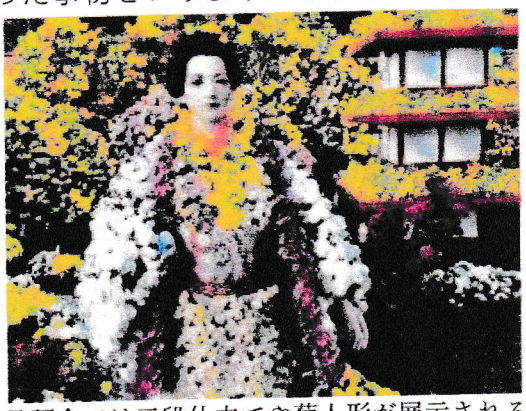


菊に舞う蝶は秋の愁いを伝える

文・写真：堀内　正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

春の花は「百花繚乱」といわれるほどに多彩ですが、秋の花といえば菊。ここの「黄花」も菊のこと。「明日」というのは、重陽節（旧暦９月９日）が過ぎたあとのこと。重陽節には菊をめでるならわしがあって、その日に合わせて花の盛りを迎えるよう栽培されるようです。
ですから「明日黄花蝶也愁」（蘇軾「九日次韻王鞏」から）は、重陽節を過ぎて菊の花が凋零に向かい、それを知る自分も蝶も愁えているというのが、本来の意味合いです。蘇軾の愁いで詩的な味わいがある成語として成り立っているのですが、後には単に過ぎ去った事物をいうようになりました。

「重陽」はご存じのように「陽数」（奇数）の９が重なることから。重陽節はいま中国では「老年節（敬老の日）」に当てられています。高齢化率２０・６％の上海では１０月は「敬老月」で、敬老・愛老・助老といった「崇尚敬老」行事がさかんです。
日本では平安時代に宮廷行事に採り入れられ、菊花を観賞したり長寿の効能がいわれて菊酒が嗜まれました。いまでも「菊祭り」が各地で催され、「笠間の菊祭り」（第１１０回・１０月２１日～１１月２６日）が有名です。華道ではこの日は菊のみで生花を活けます。



各地の品評会では三段仕立てや菊人形が展示される

「明日」は過ぎ去ったことをいうにはふさわしくないというので、最近は「昨日黄花」が成語として使われています。米ドルの国際的な力がいまや落ち目というときには「昨日黄花」のほうがニュアンスが伝わるというわけです。
女子バレーで日本が中国を破り金星を挙げると、中国では「明日黄花」の評を受けたりします。いまは「百花斉放」といっていいほど使い方も多様で、普及の初めは独占状態だったアップルの商品が売れなくなるのも、金融中枢の香港も、空気汚染で石油も、動物愛護で毛皮も、めんどうな現金決済も、みんな「明日黄花」です。
気がつけばことしは旧暦に閏五月があったので、重陽節は10月28日。この稿も「明日黄花」にならずにすみました。

蘇軾（東坡）は北宋を代表する政治家、詩人。

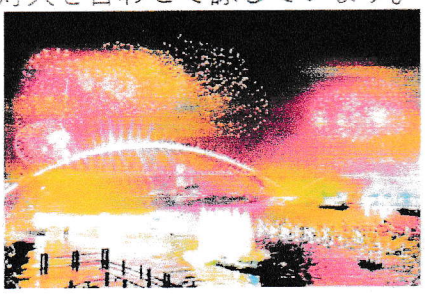
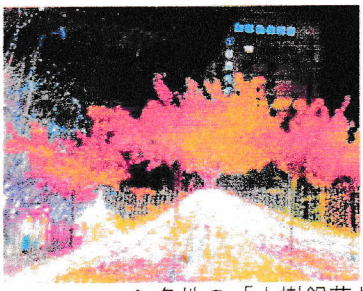
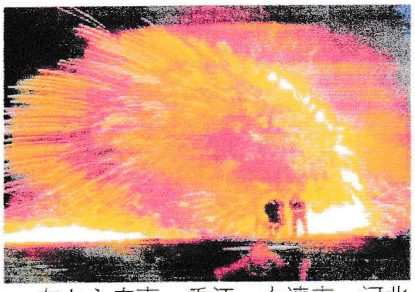
堀内さんと愉しむ四字熟語　第15回

火樹銀花

かじゅぎんか

文・写真：堀内　正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

冬の夜を明るく暖かくする「火樹銀花」（唐・蘇味道「正月十五夜」など）というのは、なにやら現代の大都市のイルミネーションを先取りしたような成語です。クリスマス（聖誕節）、新年、そして「春節」とくに「元宵節」にはライトアップして、「夜景亮化」を競っています。
「火樹」は樹上に紅い灯火を掛けつないだ情景、「銀花」は銀色に輝く花。今なら打ち上げ花火の銀色の大輪の花がピッタリですが、上古の詩人は「銀花」にどんな情景を託したのでしょうか。月明かりで輝いている雪の情景でしょうか。蘇味道は上の詩に「明月逐人来」の句を継ぎ、李商隠は「月色灯山満帝都」と月光と灯火を合わせて詠じています。

↑各地の「火樹銀花」　左から広東・香江、大連市、河北・蔚県

日月が同時に昇って沈む「春節」（初一、新月）から三日月となり半月となり凸月となって十五夜を迎えます。この年初の満月を待って湯圓（湯元、元宵とも。南北・地方で異なりますが、ゴマや穀物のタネなどを包んだだんご）で祝って過ごすのが「元宵節」です。
この夜、農民は戸々に夜どおし明かりを灯して今年も豊作であるように、無病息災であるように、そして子宝がさずかるようになどを満月に祈るのです。大地が温もる「春回大地」を前にして、ここから農作業に精を出し、八月十五日には粒々辛苦して得た収穫物を「中秋名月」に供えて豊作のお礼をし、月餅をいただけるようにと願うのです。

「平溪天燈祭」（天燈節）
元宵節に夜空に天燈を飛ばして先祖へ平穏無事を告げご加護を祈ります。何万という天燈が空高く昇ってゆく光景は幻想的です

「長崎ランタンフェスティバル」
春節から元宵節まで、新地中華街を中心に１万数千個のランタンや点灯式オブジェが飾られます

外はなお骨を刺すような寒気の中の「観灯」で、農民は豊作を祈り、皇帝は都で万民の幸せを祈ったのでしょう。唐の玄宗の父叡宗のときの「元宵灯節」が最も豪華で、安福門内に２０丈の灯輪を建て、燃灯五万盞を掛けたといいます。玄宗も劣らず上陽宮中に広さ２０間、高さ１５０尺の灯楼をつくらせて貴妃とともに鑑賞しています。
日本では「長崎ランタンフェスティバル」が知られ、台湾では「平溪天燈祭」の何万というランタン飛ばしが幻想的な夜を演出して人気になっています。